

帰国後につながる学習支援

生田 佳澄

(14-1, ホンジュラス, 小学校教諭, 沼津市立今沢小学校)

こんにちは。静岡県沼津市立今沢小学校の生田と申します。14年1次隊で派遣させていただきました。静岡県の教員歴18年目になります。7年間中学校の家庭科の先生をやっていました。その後、文科省の地域指定の研究、性教育の研究だったのですが、家庭科の保育との関係があるということで小学校の方で研修を続けるようにという話で、研修をするために小学校に来ました。その指定研究が終わった後に原小学校というところにかわりまして、その地域では外国人がとて多いような学校に行きました。そこで外国人担当にはじめてなるわけですが、そこから数えて9年目に今年なりました。内2年間、14年1次隊としてホンジュラスの小学校教員として派遣させていただいて、帰国後その学校にもう1回1年間戻る形で、そしてその次に市内で外国籍の1番多い学校に勤務させていただき、その次に中学校と小学校が道路を挟んで隣同士というそういう学校に今年から勤務しているところです。平成18年度には、JSL (Japanese as a second language) カリキュラムの関係の研修にも参加させていただきました。また、オーストラリアとかペルーの学校訪問もその後させていただくことになりました。

何故(青年海外協力隊に)参加したのかというところのお話をしたいと思います。原小学校1年目に外国籍の子どもたちと初めて出会ったとき印象的な保護者とお子さんがいました。その保護者の方から言われたのは、あと半年後に帰国します、ブラジル人学校が隣町にあったんですけれど日本の小学校、公立小学校のよさに触れたいという希望で日本人の学校に入れさせた、半年後に帰国を予定しているということで、日本の国語の教科書が読めることだけがこの子にとっての学習のゴールではない、この子がブラジルに帰国した後に進学させ将来も夢に向かって勉強を続けさせたい、そうしたときに日本の公立学校のよさ、それから帰国後の不安というのをすごく感じていたので、ぜひ帰国後にもつながる学習支援を考えてほしいということを強くおっしゃいました。私もその時は1年目で全く分からなかったもので、何がいいんだろうということですごく戸惑ったわけですが、先輩教員や管理職に尋ねたり、本当に分からないことは保護者と話し合いながら進めて会議を作りながらやってきました。そのときに現地の教育を知りたいということ、それから開発途上国への国際協力のあり方をきちんと学んで帰国後公立校のよさを現職教員として追究していきたいということがわたしの参加の強い動機となりました。

1年目はホンジュラス、算数プロジェクトでとても有名だと思います、先輩隊員が長い間築き上げてきて筑波大学とか大学の関連の専門の方々をお呼びしながらきちん

とした体系づくりの中で積み上げてくるプロジェクトですが、そこと1年目に関わらせていただきました。国境近くのいろんなところだったんですけど、それぞれの先生方に大学で教員の再教育ということでいろんな指導書が出来上がったところで、その指導書の活用法についてそして教具の作り方とか教材の活用の仕方とかそういうのを提示しながら伝達していくような授業だったんですけども、それを受けた後各学校でどのように授業を展開しているのかをそれぞれの学校を見させていただいてやるわけなんです。ある学校は濁流が流れる壊れかけた橋をカウンターパートと一緒に渡りながら、沼地をずるずると足を汚しながら行き、背丈を越えるくらいの草がたくさん生えているようなところをかき分けかき分け声だけを頼りに、ようやく着いた頃にはもう授業が始まっていたところだったんですけども。そういう山の中にそれぞれの子どもたちが住んでいてそこに集まり勉強を続けているわけなんです。そういう実態を含めてみることができました。2年目は首都で算数科の研修ということで、ラスアメリカスという小学校に入って教育をしました。

その後ですが、沼津の国際理解教育はこのような組織立てになっていました。帰国後1年目には、総合学習の授業の中で、文化庁の海外研修生が来校していただける機会もあったので、一緒にふるさとを紹介し合う授業を展開したり、掲示や校内放送、集会などをやってきました。市内においては沼津市教育振興会、沼教振と略させていただきますが、そこの研修会で派遣報告会をしたり、外国人生徒交流会というもののの中で自分の経験を活かさせていただいたりしました。また、推進委員もさせていただいている関係で市の教育委員会と連携をとりながら研究を進めていくことができました。また、地域の方では時同じくして中越地震があったもので、現地に行ったときにちょうど新潟の長岡市の劇をやっていた関係もあったもので、そういうところでチャリティーコンサートと一緒にやったり通訳をやったり、長岡市の方に行って1番被害被災のひどかった学校の総合学習で仲間と一緒にコンサートのような形でやりました。

帰国後2年目、校内では先ほど申したように（外国籍の生徒が）1番多い学校へ行きましてカリキュラムを検討したり、そのときにオーストラリアの教育視察の話もありましたのでそこにも行ってきました。このような形でやってきて、そこで文科省の方との平成17年度外国人児童・生徒等に対する日本の指導のための指導者養成を目的とした研修があったのですが、そこで大きなネットワークを得る機会を得ました。そして帰国後3年目には、保護者会、保護者がどんなこと言ってるのかというのは以前はなかなか難しかったんですけども、帰国したらおかげさまで言葉を理解することはできた。今まで言葉は大きな壁となっていて、心は通じ合っているような気持ちはあったんだけど、やっぱり何が学習支援に必要なのかとかどんな困り感があるのかとか、そこの困り感にぐっと入ったことはできなかったんですけど、そのところが（青年海外協力隊を）経験させていただいたおかげで、一緒に共感しつつ学習体系の違いというところもわかりつつ、意見の吸い上げに生かすことができたんじゃないかと思いました。また家庭科の持つ教科の魅力、幅の広がり、社会科の持つ

奥深さというものも感じました。子どもたちは今まで、例えばこのような形で自分たちの合言葉を作ったりできました。また、キャリア教育の視点を取り上げたそういう研究も進めることもできたのではないかと思います。また、NGOを立ち上げるための支援もして、ラジオ番組も作ってみました。その中では、親御さんの中で喘息のひどい子どもがいてどこの病院に行ってもわからなかったというところで、救急協力員の放送があると知ってスペイン語でもぜひみんなに知らせたいということ、親子のコミュニケーションを図りながら進路に対する夢を育てたいという世界で共通のお話とか自分たちの国に伝わっているというお話とかを2ヶ国語で伝えていきたい、それから情報共有をしていきたいということを目的にやったものです。

今は青年海外協力隊の静岡県OB会の方も連携をとって、16年1次隊の〇〇さんという方がいるんですけども、その方が会長さんをやりながらタティンハラ(?)という市民団体が沼津市で初めて生まれているという状態です。その他、大学との連携も取れるようになりました。保護者も一緒に勉強ができるようにということで、

“14-6”はどうなのかというところなんかも教えていったりとかしました。帰国後4年目ということで、教材研究も進めながら、また帰国予定のある子に対しては帰国後につながる授業というのを展開できるようにということで、自分自身の授業をみなさんに校内でも公開したり研修しあったりできるようなそういう体制づくりもしてきました。協力隊を育てる会の助言も含めまして、ペルーの教育省の方で今回企業経営研究所という助成のほうも受ける形ができて、どちらの学校に行こうが学習を進められるようなシステムも得ることができたのではないかと思います。今後の課題については以上この3点です。今後ということで、この3点についてはとても大事なことだなと感じました。以上です。